

《書評》

『広島のともしび:原爆小頭症「きのこ会」と記者・秋信利彦』 平尾直政* 著、地平社、2025 年

後山 剛毅†

本書は、著者が広島修道大学に提出した修士論文「原爆小頭症を問いつけるジャーナリズムに関する一考察：取材対象者の盾となったジャーナリスト・秋信利彦を中心として」を大幅に加筆・修正したものである。著者は、大学卒業後、広島県のラジオ・テレビ兼営局に勤め、同社で「原爆小頭症」をテーマにドキュメンタリーの制作に携わり、1996 年からはその支援者グループに参加、2009 年からは支援者グループ「きのこ会」の事務局長を務めている。本書は、著者の先輩ジャーナリストである秋信利彦の活動を中心に、秋信の足跡を通じて浮かびあがる「きのこ会」（原爆小頭症児と親たちの会）の軌跡を綴ったものである。

本書で著者が追う「きのこ会」とは、1965 年に発足し、いまなお活動が続けている原爆小頭症被爆者とその親たち、そしてその支援者で構成される組織である。「原爆小頭症とは、妊娠早期の胎児が、母親のお腹の中で強力な放射線を浴びたことで起こる原爆後障害のひとつ」である」（3 頁）。そして、本書が追うもう一人の人物が、「きのこ会」の事務局に携わり、自身もテレビ局の記者として著者の先輩ジャーナリストであった秋信利彦（1935-2010）である。

秋信は、1958 年にテレビ部門開局前のラジオ局ラジオ中国（のちの RCC）に入社し、記者として数多くの番組に携わった。1965 年に結成された「きのこ会」の事務局として奔走しつつ、その記録を残しながらも、自身はその内容をほとんど報道することはなかった。記者としての秋信は、昭和天皇が戦後初めておこなった 1975 年の記者会見において「原爆投下の事実をどう受け止めたのか」と質問し、天皇の「原子爆弾が投下されたことに対しては遺憾に思っていますが、こういう戦争中であることですから、どうも、広島市民に対しては気の毒ではあるが、やむ得ないことと私は思います」という言葉を引き出した人物である。著者は、こうした「秋信の足跡を辿ることは、今まで明らかにされることのなかった原爆小頭症ときのこ会の運動史を見つめることであるが、メディアをとりまく環境が大きく変わろうとしている今だからこそ、ジャーナリズムのありかたについて考えるきっかけになるのではないかと私は思う」（9 頁）と意義付けている。

そうした本書は、全 10 章から構成され、戦後まもない時期から 2000 年代中頃にいたるまでの原爆小頭症を取り巻く社会の歴史を、ジャーナリストの視点を通じて辿っている。第 1 章から第 3 章は、ジャーナリスト・秋信利彦の紹介とともに、戦後まもない時期に原爆小頭症がいかに差別的で抑

* 広島大学大学院博士課程／「きのこ会」事務局長

† 立命館大学大学院先端総合学術研究科 研究指導助手
okariki.gon@gmail.com

圧的な扱いを受けていたのかが綴られている。とくに第3章では、「きのこ会」結成の契機となったABCC（原爆傷害調査委員会）への秋信の取材の様子が回想録をもとに克明に記述される。とりわけ当時のABCCが、小頭症の存在を論文で公表しながらも、それらを日本語で社会に公表していない理由を「誰も聞かないから」と片付けていた状況や、ABCC内部の女性が患者情報を秘密裏に提供するといったスリリングな調査の実態が明らかにされる。

第4章では、「きのこ会」の設立とその当初の運動の様子が綴られる。「きのこ会」が設立された1965年当時、原爆小頭症児らは「4号被爆者（胎内被爆者）」として被爆者健康手帳の交付は受けていた（112頁）が、原爆小頭症は1957年に制定された原爆医療法では「原爆症」としての認定は受けていなかったために、医療費給付の対象外となっていた。「きのこ会」の運動は、まず原爆小頭症の「原爆症」認定をめぐる展開され、1967年に「近距離胎内被爆症候群」として認定されたが、他方で「胎内被爆小頭症」として認定されたのではないということに著者は注意を払っている。このような「きのこ会」をめぐる社会との軋轢や認識の不一致は、本書の第6章で記述されている。原爆症の認定にこぎつけた「きのこ会」の次なる目標は、小頭症の生涯にわたった補償の獲得であった。そして、1978年に運動が実を結び、月額3万3600円の「原爆小頭症手当」の創設に漕ぎつけた。こうした「きのこ会」の運動の展開を支えたのは、ジャーナリストとして「国の方針や認定法の解釈の矛盾」（130頁）を突き詰める秋信の視点だったと著者は位置付ける。

第6章では、原爆小頭症をめぐる社会に生成される誤った情報に対して事務局員たちがどのように向き合ったのか、その葛藤が綴られている。事務局員たちはそれぞれがジャーナリストであり、目の前に他の「どの取材者も知らないような情報に接して」（200頁）いながら、「それをスクープとして報じ」ず（200頁）、「外部の取材者に対しては原爆小頭症に関する正確な情報をレクチャーし、誤った情報が社会に広まることを防いだ」（200頁）。本書では、一貫してこうした記者らの葛藤のなかに「きのこ会」をめぐる報道が位置付けられていたことが示されている。

こうした葛藤が顕著に示されるのが続く第7章である。生前に「自分ではテープやフィルムには触らない」と述べていたとされる秋信が、2本だけ制作した番組『面会室』（1970）と『怨！ 認定患者0074716号』（1979）の制作経緯とそれらの番組に秋信が込めた思いが、回想録や関係者へのインタビュー、当時の台本などの情報を通じて記述されている。これらの作品を通じて見えてくるのは、それぞれの作品が扱った原爆小頭症被爆者家族を襲った状況に対する秋信の「怒り」であると著者は提示する。

『面会室』では、原爆小頭症被爆者と両親がつつましく暮らしていたなかで、両親を襲った病気とそれによる「家族」の崩壊の過程が、『怨！ 認定患者0074716号』では、原爆小頭症被爆者として被爆者の認定を受けている娘を残しながらも、自身は被爆者として生前に認定されなかった母親の無念に対する怒りが綴られているという。秋信のほかにこの二つの家族の現状を伝える人がいなかったというなかで制作された二つの番組は、ともに原爆小頭症被爆者だけでなく、その家族を同時に活写していると著者は評価している。こうした小頭症被爆者と家族の具体的なエピソードは、本書の第5章と第9章で「きのこ会」の活動と関連付けながら記述される。

第5章と第9章では、「きのこ会」の家族の様子がうかがえる。第5章では、おもに花本家と長岡家という二つの原爆小頭症被爆者家族の話を中心に、「きのこ会」結成から小頭症被爆者の親の死去、そして親亡き後の小頭症被爆者の現状が綴られている。第9章では、親なき時代となった2000年代以降の「きのこ会」を取り巻く状況と、そうしたなかで秋信自身が体調を崩しながらも、死の直前ま

で「きのこ会」を案じ、会の活動に関与していたことが綴られている。最後に第10章では、秋信の「遺志」を引き継いで、「被爆者なき後のジャーナリズム」の倫理が、「今は伝えられないかもしれないけれど、地道に記録を収集し、整理して残しておくことが、被爆者たちの思いを受け止めた者の責務なのだ」と私は思う」（289頁）と提示され、本書は閉じられている。

本書はその対象である「きのこ会」との独特の距離を隔てて記述されている。それは、何度も言及するように「きのこ会」と著者のあいだを媒介する秋信という存在によるものだろう。本書は、原爆小頭症者のありのままの姿を映し出すものではない。むしろ、本書を通じて可視化されるのは、社会と時代の変化のなかで原爆小頭症被爆者とその家族、支援者がぶつかってきた問題をいかにドキュメントとして描くかという問題の「困難さ」そのものである。それは、著者自身の体験として本書冒頭近くで次のように紹介されている。

取材を始めて12年目の冬、小頭症被爆者と家族の会である「きのこ会」の会長が亡くなった。〔中略〕私は遺族の許可を受けて葬儀のようすを撮影した。〔中略〕テレビでは紹介することが難しい原爆小頭症であるが、大切なテーマだからなんとか伝えることができないものかと考えた。できればモザイクなどの処理で観る人の心にフィルターをかけたくないし、何よりも取材された人が傷つかないような表現をしたい。ずっと考えていた。映像では伝えにくいことも、音声メディアであれば伝えられるのではないか。そう思った私は、ラジオ番組の企画書を書いた。〔中略〕初めて作ったラジオ作品は、拙いながらそこそこの評価をいただいた。

放送後、亡くなった長岡会長の長女にあいさつに伺った。そのときに向けられたのが冒頭の言葉だった。「私たちは記録として撮影は許可をしました。しかし、放送までは許可した記憶はありません」。私は言葉を失った。これまで、撮影を許されたときは、映像処理の確認などはあるにせよ、放送も同時に許されたものと思っていたからだ。（4-5頁）

戦後80年を経て、「小頭症被爆者も多くが亡くなり、厚生労働省が把握している当事者の数は2024年3月31日現在で12人、25年1月にはさらに一人が亡くなった」（287頁）。そうした時代に、「せめて記録を残してやらんと、何のためにこの人たちが生まれて来たかわからんよね」と著者は語る。秋信が残した記録を我々はどのように扱えばよいのだろうか。本書の「あとがき」に「これからは、記録をまとめるだけでなく、保存や活用の方法などについても考えなければなりません。原爆小頭症の記録はまた緒に就いたばかりなのです」（301頁）とあるように、本書は、秋信と著者という二人のジャーナリストの葛藤の軌跡を通じて、60年にも及ぶ「きのこ会」とその支援のあゆみのなかで、無数の蓄積されてきた記録の今後のあり方自体を読者に問いかけている。